[サリュ]

フランス語で<救い>の意。

Salut

人が集まる。いのち弾ける。

シアトリカル

應典院

平成9年、スタート。

● 発刊のごあいさつ

文化のお寺應典院の再建は、なにわの名刹大蓮寺が創建440周年記念事業として着手するものです。大蓮寺は、多くの文人や教育家、また芸能家とも縁の深い、文教の寺院。應典院はその伝統を踏まえ、地域に開かれた、まったく新しい都市型寺院として平成9年に竣工します。

その構想は、劇場型の本堂を有し、あらゆる世代を対象としたさまざまな研修やイベントを開催、新しいこころのエネルギーを放つ、文化創造の拠点づくりといえます。もちろん劇場機能も装備し、演劇やアートなどの自主公演なども計画、まさに都市の異界として、多くの注目を集めることでしょう。そして、すべての根本に流れる大乗仏教のみ教え――大慈悲―救い、を、いまという時代に伝えるため、應典院は永劫に一心に精進を重ねる所存です。

本誌は、應典院のＰＲ誌として一昨年より発行してまいりましたが、このたび一応の使命を終えいったん休刊、４月より体裁をリニューアル、新しい会報として生まれ変わります。どうか應典院寺町倶楽部にご入会の上、引続きご愛読賜りますようお願い申しあげます。

應典院再建委員会代表　秋田　光茂

文化のお寺〈應典院〉のニューズレター

6

1997● WINTER ●VOL.6

発行■應典院再建委員会
編集■サリュ編集部

應典院、４月の落慶日程、決まる！

いよいよ應典院が、本年４月27日に落慶の運びとなりました。当日は、宗門・寺門また工事関係者 130名参加による盛儀を予定しております。

また、この佳辰にあたって、應典院では下記の通り関連行事を行います。

◆

○入仏式並び宝珠奉安式
４月13日（日）11:00
○落慶式
４月27日（日）10:00
○宗教者のつどい
４月27日（日）17:30
講演　汐見稔幸東京大学助教授
○幼稚園のつどい
４月28日（月）10:00
講演　汐見稔幸東京大学助教授
○文化人のつどい
４月28日（月）18:30
ゲスト＝橋爪紳也京都精華大学助教授
授他
○大蓮寺檀信徒記念祝賀会
４月29日（祝）10:00

◆

関係者のみなさまには、３月早々に正式なご案内状をお送りいたしますが、何とぞご予定いただきますようお願い申し上げます。

盛大なご支援ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

應典院寺町倶楽部、会員募集開始！

本年１月１日より、應典院寺町倶楽部の会員募集が開始されました。

應典院は社会に開かれた運営を目指しており、特定宗派の教化・布教といった概念とは別個の、独自の理念を持っています。それは伝統的な寺院文化を基盤とした、新しい都市のこころの文化の拠点であり、そこに共感する方々を会員化し、ともに学びあう関係づくりを願いとしています。

むろん、青年授戒や追悼会など應典院の仏教セレモニーは浄土宗の儀軌に則ることは言うまでもありませんが、これとは別にひろく一般向けには、その対象や機会に応じた区別化が必要となるでしょう。いい意味で、両者の区別を明確にして、まず市民仏教のステージに立つことを優先したいと願っています。

このたび應典院寺町倶楽部が発足、應典院における新たな学びの場として、積極的に活動を展開してまいります。どうか趣旨にご賛同の上、ぜひともご入会いただきますようお願い申し上げます。

■会員制度の特徴

○参加の機会は無限。

應典院寺町倶楽部の会員とは、應典院プロジェクトが推進する、いわばこころの文化運動のサポーター。今後應典院で開催される研修や教室、イベントに参加できるほか、あなた自身の企画で應典院を活用することができます。

システムとしては、最近活発なＮＰＯ（民間の非営利組織）と、その主旨は似ていますが、倶楽部の場合、特定の専門分野を持たず、広く「こころ」全般にわたるものを、多角的に取り組んでいきます。ボランティアや環境、カウンセリングや国際交流等々…それだけ多彩で間口が広いので、参加の機会も無限にあるといえましょう。

○こころ・生き方・感動

倶楽部の会員は、應典院プロジェクトを支えていただくサポーターであり、頂戴した会費は、プロジェクトの活動基盤（資金）に充当されます。それをを通じてよりよい社会の実現にともに参加していただくことが目的であって、至れり尽くせりのサービスはできないかもしれません。

しかし、あなたに「学ぶ」という意思があれば、倶楽部のメリットはたいへん盛りだくさん。とくに、月例のシリーズ講演会<寺子屋トーク>は、多彩なジャンルから一線の講師陣が出講、主に会員を対象に開催されます。多彩な講師の方々に共通するテーマは、「こころ・生き方・感動」。倶楽部の会員には、いわば必須のカリキュラムのようなものですから、この講座に参加することで、あなた自身を磨き上げてください。

○入会のために

應典院寺町倶楽部では、以下の４つの会員枠を設けています。

一般会員１０，０００円
学生会員　３，０００円
法人（団体）会員３０，０００円
賛助会員５０，０００円

会員期限は入会した日から１ヵ年で、その間、

１）現代寺子屋講座の聴講
２）機関誌の定期送呈
３）主催行事の招待・優待
４）應典院の利用　その他さまざまな特典を得ることができます。

具体的な要項は、別に入会要項がありますので、くわしくはそちらをご参照ください。

應典院再建勧募のご協力ありがとうございました

その3／50音順・敬称略／ご家族は併記

〈寺院篤志〉
上野　博史
内田　康教
光正寺
杉山　慶教
千野　法人
馬渕　承教

〈聖柱銘記〉
生野　琢也
生野　有記
射手矢光作
射手矢千鶴
射手矢正太郎
射手矢なづき
萱園　洋明
萱園　美智子
河中　聡之
河中　沙百合
栗山　正徳
兒嶋　祐輝
斉藤　昌之
佐藤　元彦
シュハードMサムエル
菅原　昭
菅原　真純
菅原　慶子
菅原　崇
菅原　太
菅原眞佐子
高木　環
中村　丈哉
野間　成則
野間　宥佑
福嶋　亮二
古堅　憲司
古堅　孝子
松井　亜樹
松井　保憲
守茂山治勲
三原　敏彰
三原　壽子
三原　誠之
三原　直也
三原　脩吾
山形　伸明
山形加珠子
山形　祥礼
山形　倖司
山原　潤一
山原　芳美
湯川　安一

〈篤志〉
平野つる子

應典院　〒543 大阪市天王寺区下寺町1―1―30　TEL(06)771-7641 FAX(06)771-5943

仏教から始まる、わたし探し。
呼吸するお寺、應典院、スタート。

應典院住職　秋田光彦師に聞く。

昔、巡礼は「死出の旅」を意味していました。自分を捨てて、ホトケを巡る。日常を越え、常人には分からない何かを得て、そこで人々は一種の彼岸感覚を養っていたのではないでしょうか。死を絆とした巡礼のネットワーク。何かを消費するための観光商品ではなく、何かとつながるための霊場体験は、ぼくには小さな衝撃でした。

参加者のひとり、Kさんの感想より。

「何といっても（私は）、南無阿弥陀仏、お母さん、助けてください！　他に頼りのない身なり。大勢の檀家さんの皆さまとともにお念仏を称えれば、十念が百念、百念が千念になって必ず阿弥陀さまに届く、そんな気がしました…」

福音としての「脳内革命」？

少し古めかしいお話のつぎは、最近流行の「脳内革命」について。ついに五百万部を超え、平成最大のベストセラーを記録したこの本、古典的な聖典や聖者の引用を用いて、かなりカルト的な読まれ方をしているようです。昨年の読書界は、そのほかにも宗教的な主題を扱った本が軒並み売れたとか。オウムで宗教には懲りた?はずなのに、このトレンドの背景には何があるのでしょうか。

既成の宗教の多くが、とくに若い人に対し、「救済」を説かなくなった時から、日本の宗教は、一種の情報レベルに落ちてしまった、という説があります。知識としての宗教は発展しましたが、感性としての宗教は衰える一方。先祖教という伝統宗教はしっかり定着したが、先祖観の希薄な若い世代には、「救済」はもっと別のところに拡散してしまったのが実情ではないでしょうか。その意味では、現代のベストセラーは、救われるための福音ともいえます。

若い世代と宗教について話していると、よく耳にする発言があります。

「既成の宗教だけが宗教ではない。自分たちだって信じる心を持っているが、それは仏陀やキリストじゃない」

長い間、交渉のなかった既成の宗教に対し、そういう不信感があることを、ぼくは否定しません。だから、「脳内革命」もまた、彼らの言うこれからの宗教のかたちを指し示すものなのかもしれませんが、しかし、その福音は、先の見えない、変化の激しいこの時代の、いつまでを支えてくれるものでしょうか。

巡礼のネットワーク

お元気ですか。

秋たけなわの十月某日、うちのお寺の檀家さんを連れて霊場巡りをしてきました。浄土宗の場合は、開祖法然上人ご遺跡である二十五霊場が人気ですが、今回ぼくたち夫婦が引率して三十七名の善男善女ともどもお詣りさせていただきました。

巡礼といっても、若い世代にはピンと来ないかもしれません。四国のお遍路さんをはじめ、観音参りに地蔵尊、不動尊等々…ある軌道上を願いを重ねながら巡る行為は、日本のあちこちで宗教文化として長く親しまれてきました。

最近の巡拝団は観光バスで、足早に回るのが一般的なのですが、それでも一過性のツアーとは違って、大きな同心円につながったような、不思議な一体感をおぼえます。同信同行、巡拝団ならではの親近感はなぜでしょう。



法然上人 25 霊場巡拝団。百万遍知恩寺にて。

普遍に開かれた「個」

ぼくは、宗教は個が普遍に開かれた、全人格的な交流を言うのだと思います。そのダイナミックな営みは、人を善意に運ぶだけではない。いまなお人を狂気ならしめ殺意に走らせる、ネガティブな側面を抱えています。それほど宗教は怖い。普遍に対し、臆病かつ傲岸な日本人は、いつの間にか対話することを放棄してしまったかのようです。

仏教誕生二千五百年、日本伝来千五百年、という長い時間の中で、日本人が受け止めてきた時間＝普遍というものを、もう一度考え直すべき時代だと、ぼくは思います。時には反発され弾圧され禁止され、あるいは差別や搾取の根源になりつつも、仏教が、いまなお残っているのは何故か。そこに「脳内革命」には達しようのない長大な時間と、歴史との執拗な対話を感じないわけにはいきません。

でも、矛盾するようですが、「脳内革命」や、自分の「信じる心」が、刹那であるといいたいのではありません。そういう反発や疑念はけっして無意味なことではない。なぜ絶対が絶対であるか、そのことにたえず検証の目を向けていくことは、これからの超情報社会を生きる、基本的な態度だと思うからです。

絶対の尊さ、絶対の激しさを、経験を通じて学んでいく。目まぐるしく変化する「流行」の中で、「不易」を尺度にたえず問いなおす。その意味で、仏教の存在は、今日ぼくたちが生きていく上で、貴重なテキストになりうると思います。

目的のない時空・應典院

さて、應典院の工事は着々進捗して、新年には外観はすっかり完成、内装と外溝工事を残すのみとなりました。コンクリートとガラスと鉄の、素材は近代建築そのものなのですが、軽やかな知性を感じさせるのは、さすが建築家の創造力です。丸い本堂が、ゆとりと開放感を存分に表現しています。建物本体は二月末に完成、引渡となりますが、その後、オフィスの設営や機材点検などを経て、いよいよ四月二十七日、落慶式を迎えることになります。

すでに具体的に計画中の事業もいくつかあり、いずれ詳しくお知らせしますが、應典院にとって「事業」以上にだいじなことは、「目的のない時間と空間」です。たとえば人けのない本堂で、ひとり仏と向き合ってみる。親しい友人と、たっぷりお喋りの時間をとってみる。ある夜なんかは、施設を全部開放して、何をしてもよい、いろんな人たちが、袴脱いでネットワークづくりに参加するのはどうでしょう。

目的や着地点を設けず、新しい顔ぶれと交流することで、だんだん自分たちの輪郭が見えてくる。何だか浮世離れに聞こえるかもしれませんが、これこそ應典院的コスモスだと、ぼくは信じています。ここでは超能力も神秘もいらない。あなたを支えるのは、すばらしい仲間たちとあなた自身の輝きなのだから。

ということで、應典院が本年四月から正式スタート。これに伴い、應典院寺町倶楽部が発足して会員の募集が始まりました。一昨年より六回発行してきた本誌も、いちおう当初の役割を終え休刊となります。長い間、ご愛読ありがとうございました。

四月からは、「サリュ」の体裁を改め、寺町倶楽部の会報誌としてリニューアル。引き続き、会員として、ご愛読いただければ幸いです。今度は、「読み手」としてでなく「参加者」として、ぼくたちの試みにぜひつながってください。

わたしから世界へ――。

應典院の深呼吸が始まります。

TALK&TALK

家族からファミリズムの時代へ。
應典院から始まる、新たな家族の物語。
——第三回應典院トークコンサート

■應典院の持つ求心力

月半ばからの突然の寒さが少し緩んだ十一月二十六日、一心寺シアターで第三回應典院トークコンサートが開催されました。

今回のテーマは「都市・家族・仏教」。大蓮寺の秋田光茂住職の開会あいさつに始まり、應典院住職の秋田光彦さんの語りなどによるメディア説法「父に祈りを」、さまざまな分野で活躍する人が場としての應典院への期待や可能性を語る應典院井戸端トーク、大阪大学教授の大村英昭さんをゲストにむかえたトークセッション「都市・家族・仏教」が行われました。

いよいよ四月二十七日の落慶法要に向けて、建物の外装はほぼ出来上がり、内装作業が日に日に進んでいる應典院。今までパースや模型などでそのユニークなデザインに親しんできましたが、実際に現地でできあがりつつあるその姿は予想以上に圧倒的な存在感があります。そして、建物以上にそこで何ができるのか、どんな出会いがあるのかといったソフトに対しても私たちの期待は膨らんでいます。

コンサート第二部の井戸端トークは、短い時間ではありましたが、應典院のネットワークの広がりを予感することのできる、そんな出会いの場となりました。

コメンテーターとして出演したのは、歴史街道推進協議会の足立久美子さん、乃村工藝社事業開発研究所の長谷川里江さん、関西国際交流団体協議会の加山弾さんの三人。実際に自分が應典院という場をどのように使ってみたいか、について発言されました。

京都・奈良・大阪を中心に、日本文化の発信基地づくりや歴史文化を活かした地域づくり、新しい余暇ゾーンづくりをテーマに調査研究事業を進めている足立さんは、應典院では人と人との交流が生まれる実験や人が肩書など関係なしにかかわることのできる「感性の野生の王国のようなサロン」ができたらいいな、と語ってくださいました。また、人が集まる・人を集める「場」のプランナーである長谷川さんは、應典院を「自分たちで何かができる場」と評価され、生前葬や新しい生き方を考える実験をしてみたいとも。そして、国際交流やNGOに詳しい加山さんはまず、都心にこれだけの施設ができることはさまざまなNGO活動にとって活用価値が高いことを強調されました。またご自身がクリスチャンであることにふれ、仏教・キリスト教という枠を越えた何かができれば、という意見も出されました。

それぞれ専門分野や興味関心は異なりますが、三人に共通するのは実験・創造・発信という自立的、自発的な視線、そして應典院のコンセプトである「気づき」「学び」「遊び」への共感ではないかと感じました。

司会を務めた、應典院プロジェクトの中心メンバーである西島宏さんはこの三人を「仲間になってもらいたい人たちです」と、期待を込めて紹介されていました。

この三人の方々が、今後應典院とどのようなかかわりを持っていかれるかは、まだ想像できません。しかし應典院の持つ可能性が求心力となって、ひとときその想いや文化が、確かに集まり始めているようです。建物というハードがその全容を現したのと軌を一にして、ソフトが少しずつ実感のあるものになってきた、とでも言ったらよいのでしょうか。



軽妙な語り口が楽しい。大村英昭教授。

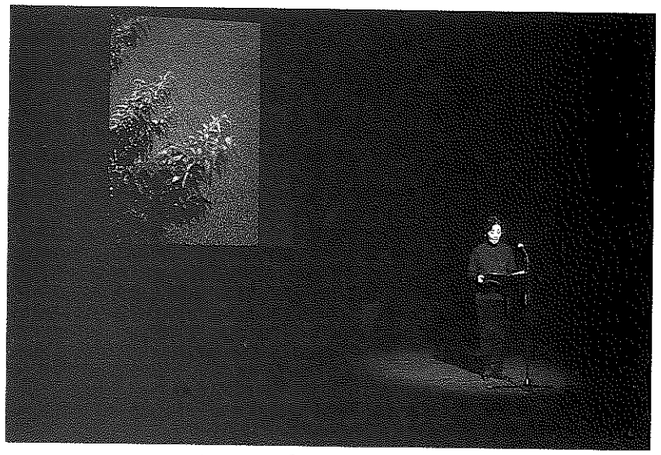
■「父の素描画」と「失われた父」

今回のテーマは「都市・家族・仏教」。第一部のメディア説法、第三部のトークセッション、ともに家族というものを「父」というファクターを通してイメージする、語り合うという展開になりました。

メディア説法「父に祈りを」は、秋田さんが導き手となり、朗読とスライドなどの映像、音響を効果的に活用したライブです。

暗い舞台に、スライドが映し出されます。緑の草原、子どもたちの風景、街、木々、夜のテニスコート——いつか見た、誰もが持っている記憶の断片のような映像に交じって飛び込んでくる、いくつかの言葉。

「父は記憶の中で、いつも私を導いてくれる」「父の忘れた思い出を、私が、いっしょに紡いでいる」…。父という言葉がそのまま家族、母をも含んでいるような不思議な感覚に包みこまれます。



メディア説法「父に祈りを」の一場面。

三児の父親であり、三世代同居の家族である自分の父からさえも、現在「おとん」と呼ばれる秋田さんが語ります。

「ぼくは恥ずかしながら、父親かくあるべき、ということがまだよく分かっていい」「父とは何か。父と子ども、あるいは母はどのような視線で互いを見つめてきたのでしょうか。また、家族の中で、父親はいかに受け入れられ、また、時に拒まれていったのでしょうか。家族を巡るお話。今日は父親のイメージをみなさんと探してみたいと思います」

前半は、明治以降の日本の父親と家族のさまざま姿が子どもの作文や、小説の朗読などを織りまぜながら「父の素描画」として描き出されました。家で仕事をし、常に家族に対し、絶対的な権力をふるってきた明治の父、戦争が生み出した父の不在という長い空白、そして戦後の父が向かった一つの戦地、単身赴任、出稼ぎ。そのほとんどは、私たちの世代にとっては、馴染みの少ない、例えばテレビドラマや映画で見ることしかできない、父の姿でもあります。

そして、「失われた父」。

一九八四年夏の日航機墜落事故で父をなくした母子が、父の死を受け入れるまでにたどった道程が、母の言葉を中心に語られます。「このような厳しい現実とは別に」秋田さんは続けます。「ぼくたちの日常の周辺にも、父の死は相次いでいます。存在はあるが、家族と関係をつくることができない、理解しあえない——父のイメージが急速に、もろく壊されていきます」。

女子高校生のコンクリート詰め殺人、息子による両親金属バット殺人の新聞記事のスライド。子どもたちの暴走を止められなかった父、母、家族の悲劇が一九八〇年代から急速に増加しました。父の存在、またイメージの崩壊は家庭の崩壊を象徴するものでもあるととらえたらよいでしょうか。

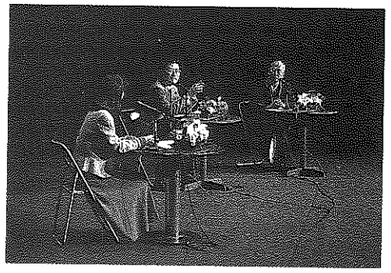
秋田さんは、現代の物質的な豊かさの中で家族は何によって協力しあうのか分からなくなってきた、父がただ力を誇示するだけでは、家族のバランスがとれなくなってきたとも語ります。

■父のイメージの崩壊と再生

この「父のイメージの崩壊」という言葉に関係して、ある言葉を思い起こしました。

不登校の子どもの心のケアを中心に行っている、こども心身医療研究所（大阪市西区）の冨田和巳所長は、子どもの心の問題と家庭に関して「家庭内での父性の欠如」を、しばしば指摘されました。現代社会では、仕事で父親が家庭にいる時間が少ない上に、子育てにも参加しない。だから、守る、受容する存在である母親の存在＝母性が増幅し、本来、家庭において社会性を教えるべき存在である父親＝父性が、家庭から欠如してしまっている。このことが、子どものこころにも大きく影響し、不登校などにも関わっているという言葉でした。

秋田さんとは少し切り口が異なるかもし



「東京物語」の上映もあったりで、トークは白熱した。

れませんが、これも、現代の家族、とりわけ父が直面している課題の一つの側面を表していると思いました。

では、崩壊した父のイメージの再生はどのようになされるのでしょうか。

終盤にさしかかった舞台では、ノンフィクション作家の柳田邦男さんが一九九五年に出版した「犠牲（サクリファイス）――わが息子・脳死の十一日」の一節が朗読されています。

（前略）「洋二郎、おやじが来たぞ」
私は彼の耳許で声をかけた。
彼の心臓の鼓動が高揚したのは、私が来たのを喜んだためであるような気がしたので、私はベッドサイドの折りたたみ椅子に座って、彼の手を握り、
「今日は、夕方までここにいるから、ゆっくり話をしよう」（後略）

これは、精神を患い、自死した作者の息子が脳死状態だった十一日間、作者が息子と息子の死、家族と対峙した記録ともいえる作品です。作者の妻もまた長い間精神を病んでおり、ある意味で非常に危機的な状態にある家族関係の中で、作者は何年間も息子と向かい合い、語り合い、彼の再生を願ってきたのでしょう。

不幸なことに、息子は自らの再生を見ることなく亡くなってしまいますが、私には、この作品にみられる「父子の対話」――それは息子が脳死状態になってからも続けられますが――に父のイメージの再生のひとつのかたちが提示されているように思えてなりません。

秋田さんは最後にこう語りかけます。

「ぼくたちにとっての父親は一度死にました。これからの新しい父のイメージを、僕たちは個々に探し出さなくてはならない。自分の生き方や個性を糧に…。そういう重い課題を背負いながら、たいへんですけど、いっしょに歩いていきませんか」

■気疲れしている家族

第一部でたどった「父のイメージ」を受けて、第三部は始まりました。

出演は、ゲストの大村英昭・大阪ガスエネルギー・文化研究所の栗本智代さん、そして秋田さんです。大村教授は宗教社会学の第一人者、多数の著書とNHKの人間大学の出演などで知られ、同時に浄土真宗のお寺の住職でもいらっしゃいます。

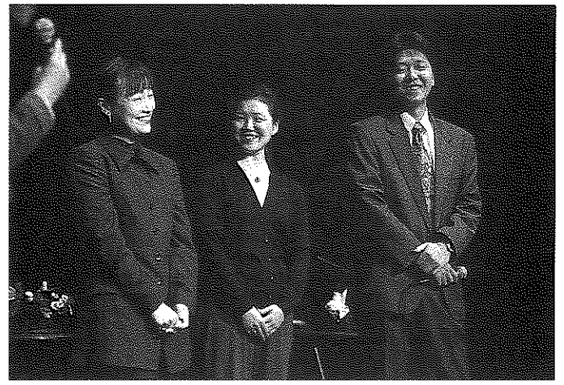
トークセッションは、まず現代の家族はまりこんでしまっている状態というのは何なのかということから始まりました。それを大村教授は「弱いやさしさの蔓延」「けなげに家族らしさを保とうとすることへの気疲れ」と表現されました。秋田さんも、このけなげさに気疲れしているということに共感を示し、子どもがいじめなどの問題を親に最後まで相談することができないでいる状況も、一方は親に言っても仕方がないという諦め、もう一方は親の期待を裏切ることになるという気遣いからきていると分析されている、と話されました。

そして、かつての「子どもの気持ちや反抗を受け止めてくれた」家庭の姿へと話題は移り、映画監督・小津安二郎の代表作「東京物語」が舞台スクリーンに映しだされました。小津監督の作品には、日本の家族の原風景が描かれているという評価が多いことは有名な話です。

秋田さんはこれを受容の風景、と指摘され、小津作品の常連である俳優・笠智衆の台詞に注目しました。笠が発する言葉は、ほとんどが共感とくりかえし、さらに日本映画特有の「間」が配置されていました。かつての家族には、会話の中に無言の時間があり、その中で家族は静かに寄り添いながら、絆を再生していったのではないかといいました。

現代のように闊達と意見をやりとりし、即決、即断することに価値を置くのとは、違う家族の関係がそこには見てとれます。

話題は日本人の仏教観と家族、そして死へと広がってゆき、今の日本の家族の閉塞感とでもあらわしたらよいのでしょうか、さまざまな想いが提示されました。



井戸端トーク。右から加山、長谷川、足立各氏。

■気づきからの始まり

最後に栗本さんが提案しました。

「今の家族は、くっつきすぎて、さきほどの『気疲れ』を感じていますね。少しこの家族から離れて、あらためて家族を考える場というのも欲しいですね」

應典院は、まさにそういう場ではないでしょうか。カプセルのような、いまの家族に、異なる体験や価値を伝えることで、新たな発見が導き出されるのではないでしょうか。

秋田さんが、應典院について語られたことの中で、印象的なことばを挙げておきましょう。

「都市の中での異質な空間であるからこそ」「自分で選んで、自分で試す場」「もうひとつの家族」。

今回のトークコンサートに寄せられたアンケートの中に「今まで家族について考えたことがなかったけれど、今日をきっかけに、考えはじめたい」という内容のものがありました。私は、應典院が示してくれるキーワードの中でとりわけ「気づき」ということばに魅かれるのですが、この方は当夜「気づきの体験」をされたのではないかと思います。

「そのご縁づくりのきっかけになれば」（應典院再建委員　関本桂三さん）、應典院のテーマは本当に実現したことになります。

應典院には「学び」「遊び」という、さらに大きなテーマがありますが、すべては私の中の小さな「気づき」から始まるもの。それと全体を包み込むような縁の尊さとが、私は、應典院にふれる最初のことばとしてふさわしいのではないかと、思いました。

（取材／文　かねした　れいこ）

連載・宗教乞食のモノローグ（6）　「観経」を読む。　中谷　加代

私は今、佛教大学通信教育学部仏教学科の学生なので、毎夏二週間ばかりスクーリングで京都に滞在するのだが、あれは特に暑い夏のことだった。二百人程の大教室は、クーラーがよく効いてはいたが、それでも慣れないイスの硬さと、難しい学習との疲れのせいで、今にも居眠りの出そうな午後のことだった。

若いインド哲学の先生は「連日の勉強がお疲れのようですね。あまり上手ではないのですが、眠気ざましにバーリ語でちょっとご披露させていただきましょうか…」とおっしゃられて『沙門果経』の一部を語ってくださった。

――アジャータシャトルが四月十三日の蓮の花咲く満月の夜に感嘆のことばをもらした。「ああ友よ、なんと楽しいことであろう。月の明るい夜は。ああ友よ、なんと麗しいことであろう、月の明るい夜は。ああ友よ、なんと清々しいことであろう、月の明るい夜は。ああ友よ、なんとめでたいことであろう。さて、今日はどのような沙門あるいはバラモンに親しく近づけばよいであろうか。誰が親しく近づくわれらの心を浄めてくれるのであろうか。――

日本語にしても美しい。このお経のことばを、先生は「このところは歌うように語るのですよ」とおっしゃって、まさに歌ってくださった。夏の昼下りの大教室は、バーリ語の美しい韻の響きで満ちていた。

アジャータシャトルは阿闍世王という名のほうがよく知られている。父王ビンビサーラを殺して、その罪によって心身ともに病み、仏に帰依して救われる『観無量寿経』に登場する人物である。

ずっと昔、心理学の研究生だった頃、「アジャセ・コンプレックス（罪障感のなり立ち）」として発達心理学で学んだ。実はその時始めて「お経」が物語であることを知った。

『観経』のドラマチックなファンタジー物語は、いつか本気で読んでみたいと思っていながら、忘れるともなく日が過ぎていたのだったが、あの夏の日、パーリ語の美しい韻の詩の響きの中で、再び阿闍世王に出会うことができた時から、より強く「観経を読むグループ」づくりを願っていた。ことあるごとに「お経っておもしろいよ」とふれ歩いているが、ほとんどの人はただ疑しい顔で「ふーん」というくらいで、なかなか興味を示してくれない。

ある時そんなことを秋田光彦氏にぼやいてみたら、さっそくみどり夫人がご努力くださり十数人のメンバーを集めてくださった。場所はもちろん大蓮寺。

「カウンセリングの人たちの集まりなら、カウンセリング技法を盗めるかと思って」とは講師先生の参加の弁。「新興宗教に凝ってる母をみてて、あほらしくて。それにくらべて、ここは有名な浄土宗の立派なお寺やし…」と、ブランド宗教好きの人。「私の宗教はキリスト教、でも仏教もみてみたい」と、味見気分の人。「今までいっしょに学んできた人がみな参加するので」と道連れ精神の人。「アジャセという非行少年の話だから、親として子どもの教育のために」とカンチガイ派の人。「ええこと教えてもらえそう」と、ものもらい趣味の人などなど…。参加者もちょっと変っている。そんなメンバーで『観経』をカウンセリング風に読んでみたいと思っている。参加者のイメージを大切にしながら一人ひとりの読み方（解釈）を聞いていきたい。

もちろんお坊さん達の「なんとバカな！」というお叱りを受けるのは覚悟の上だ。現に「そんな読み方は邪道である」とのご批判もいただいている。しかし、グループで互いに意見を出し合っているうちに「自分の考えはほんとうにこれでいいのか」とか、「あなたの考えはおかしくないか」と問われたりするだろう。そうするうちに真の教えは？と求める姿勢が生まれてくるだろう。

真の教えは、必要な時に与えられるのが効果があると思えている。読み終えた時、メンバーの一人ひとりの心が、どのように成長しているか、とても楽しみである。



会場は六甲ＹＭＣＡのチャペル。右から、司会藤野、中田、前島各氏と私。

国際協力・私の価値観はどこから…。

1996.12.14～15　第10期ＮＧＯ大学

関西ＮＧＯ協議会が主催する「ＮＧＯ大学」が、スタートして10年を迎えました。当初はＮＧＯのスタッフ育成のための養成講座として始まりましたが、ここ数年はビギナーを対象に「気づきと行動」のためのセミナーに変わり、年々参加者を増やしている、といいます。ちなみに、私は、95年～96年の９期の修了生。開発教育の醍醐味？も堪能したし、若い世代の友だちもできた。何より参加や体験を通して、自分を発見することの尊さを教えてもらいました。

そのＮＧＯ大学の第10期の講座「私の価値観はどこから…」が、昨年12月14・15日、１泊２日で開催。「宗教と国際協力」をテーマに、20代の若者たちとことん話しあってきました。

宗教なんて、知らない――？

14日は夜７時から開会、関西学院大学神学部の前島宗甫教授、世界的なＮＧＯであるセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの中田豊一事務局長、そして私３人による発題でスタートしました。日本ネグロスキャンペーン代表でもある前島先生は、当然プロテスタントの牧師さん。中田さんは、カトリックの信徒ですが、長いバングラデッシュでの生活体験からイスラム教に深い共感を。そして、仏教から私、ということで、世界３大宗教の三つ巴が当初の想像図でした。

結論から言うと、議論として集中したのは○○教××宗ではなく、もっと別の次元のスピリットについて、でした。あるいは、前提として既成の宗教を認めるのではなく、自分たちの体験や感覚でそれを見つけようする意思でした。それは宗教不信の現代、至極まっとうな反応だったのかもしれません。

自分に都合のよい宗教はない

反面夜中まで続いた交流会では、何人もの参加者から、仏教についての質問を受けました。お坊さんという気安さがあるのでしょうか、戒名批判から悟りまで、若い女性からも率直なお訊ねをいただきました。

印象だけで言わせていただくと、やはり仏教には関心はある、でも、難しかったり、厳しかったりするのはイヤ。そんな感じでしょうか。共感のたいせつさを感じると同時に、ちょっと自分に都合よすぎるかなとも思いました。

２日目の午前中、３人で再度ラウンドトークを行いました。仏教者として参加しているわけですから、けっこう居直った発言をしました。

「自分に都合のよい宗教なんてない。普遍的な宗教ときびしく向き合ってこそ、主体的な自分が確立できる」「ＮＧＯにキリスト教が多いのは、近代主義の中でミッションが果たした役割を見れば自明。同時にそれは一神教の宿命」「いま生きていることのリアルを損なわず、普遍とつながる努力が、いまの私の生き方の支え」等々…。粗忽に過ぎた反省があったのですが、異なる価値を私なりに提出した次第でした。

異価値としてのお坊さん

で、参加者にとって、どういう受け止め方をされたのか、要はよく分かりません。異なる価値とは、仏教とキリスト教の相違ではなく、参加した若者たちと坊さんの私の相違だったのでしょう。こんな風に、古代の教えにこだわりつづける人がいる…その点では、結構満足度は高かったのかも。

最後に、いちばん思い出深かったこと。15日の朝、主催者の要望もあり目覚まし体操がわりに「礼拝」を全員で行いました。そうとでも言わないと絶対経験できない礼拝を、わずかな時間でしたが、60名の若者といっしょに行じました。

どれほどの言葉に頼るより、よほど透き通った体験でした。

（あきたみつひこ）



朝の礼拝。みんな真剣でした。

南の島からソルさん来山
子どもたちと音楽の交流会



昨年11月20日、パドマ幼稚園に南洋の島・パプアニューギニアから、音楽のお客さまを招き、年長児 160名と楽しい交流会を持ちました。

パプアニューギニア大学で音楽の教鞭をとるソル・アンソニー・ズバムさんがの人。ソルさんを招聘したＮＧＯ大学の校長藤野達也さんと秋田さんの企画で、このたびの来訪が実現しました。

ソルさんは、ご当地の民族音楽をモチーフに各国で演奏活動を続けており、この日も自慢の竹製楽器を披露。どれも初めて見るものばかりで、ソルさんが奏でる素朴な音色に、子どもたちは大喜びで、お返しに日本の民謡を合唱しました。

「国際時代とは文化や民族の多様性を受け入れていくこと。世界にはいろんな人がいるんだな、ということを、小さい時に体験してもらえたら」と、コーディネーター役の秋田さん。小さな国際交流花咲いた、なごやかな一時となりました。

若い宗教者たちと語りあう
新宗連で、２度の連続講演会



最近、應典院についての話題が高まり、秋田光彦さんも講演や取材に引っ張りだこ。このたび夏と秋２回にわたって、新宗連青年会の研修に、講師として出講しました。

新宗連とは正式には（財）新日本宗教団体連合といい、新宗教約80団体が加盟する、日本最大の新宗教の横断組織。とりわけ性格を異にする各新宗教団体が、さまざまな宗教協力運動を展開することで知られ、地域毎の学習会やボランティア活動を主な事業としています。

今回の講習会は、昨年８月２日大阪にて、11月10日東京にてそれぞれ開催され、應典院の取り組みについて詳しくお話しました。

「これからは伝統宗教とか新宗教とかの垣根を払って、相互に交流しあう時。とくに新宗教の活発な社会事業には、学ぶところが大きく、ぼく自身にも刺激になります」と秋田さん。

今年３月には、青森の新宗教・松緑神道大和山教団に招かれ、再度應典院のコンセプトについて講演の予定です。

大阪仏教寺院のパワー集め
＜ＢＶおおさか＞ついに発足

阪神大震災以降、大阪の各仏教会で超宗派のボランティア組織の発会が検討されていましたが、このたび正式に＜ＢＶおおさか＞（仏教ボランティアおおさか）が発足、昨年７月２日の発会式につづき、11月２日、第１回の研修会を開催しました。参加50名。

ＢＶおおさかでは、新年１月16日、昨年に引き続き、震災物故者の三回忌市民追悼法要を太融寺にて開筵します。秋田さんは、創設メンバーで幹事のひとり。

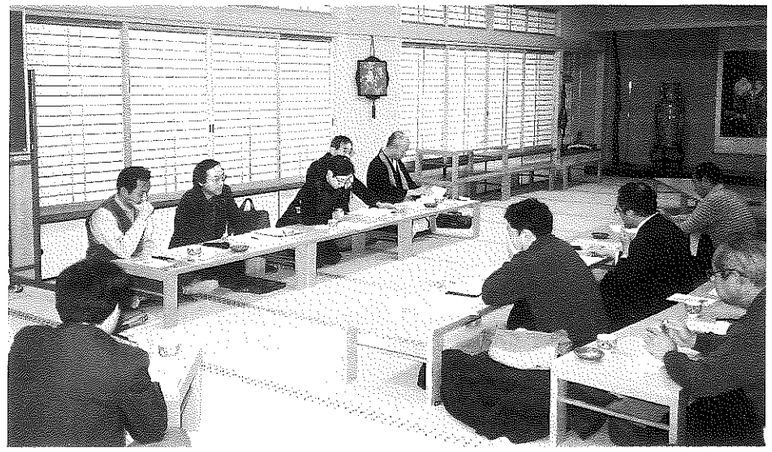
寺町の緑を考える
癒しの森プレフォーラム、開催さる

下寺町の伽藍に沿って、ゆたかに繁るグリーンベルトは、縄文時代からの地形に今なお繁茂する、大阪市内唯一の歴史ある緑。この緑に着目し、今後の環境教育に役立てていこうと、去る昨年12月１日「癒しの森～てらまちとみどりを考えるプレフォーラム」が開催されました。

これまでの自然保護的な観点ではなく、寺町と緑地が互いにおりなす「生と死＝いのち」の環境として、街なみ全体をとらえなおそうというのが趣旨。すでに昨年初めより取り組みの始まった「うえまち子どもフィールドミュージアム構想」の一環として企画されました。

当日のスピーカーとしては、グローバル環境文化研究所代表の赤尾整志さん、天王寺区子ども会連合の原田智代さん、ＧＥＣ編集長の福島古さんら論客が集い、應典院の秋田光彦さんも「仏教と寺町文化」というテーマで発題を担当しました。地域とのコンセンサスづくり、またネットワークの拡大など、フロアからの意見も寄せられ、今後の活動の高まりに期待が集まりました。

このプロジェクト、今年１月には実行委員会が発足し、６月頃に應典院にて正式なフォーラムとして出発の予定です。機関紙も１月に発行。希望者は應典院までご連絡ください。



ウォッチング應典院

應典院のソフト・ワークを読む



取材／編集部

昨年のうちに外観がほぼ完成、いよいよ應典院がその威容を現しました。工事は二月に終了、準備期間を経て、来る四月二十七日に晴れの落慶式を迎えます。
それに伴い、應典院の数々のソフトプランも進捗して、このたび新たに應典院寺町倶楽部、應典院プロジェクト応援団が発足することになりました。
應典院プロジェクトの会員組織、また具体的な運営や活動をどのように展開するのか、應典院プロジェクトのスタッフにインタビューしました。

應典院、3つの組織

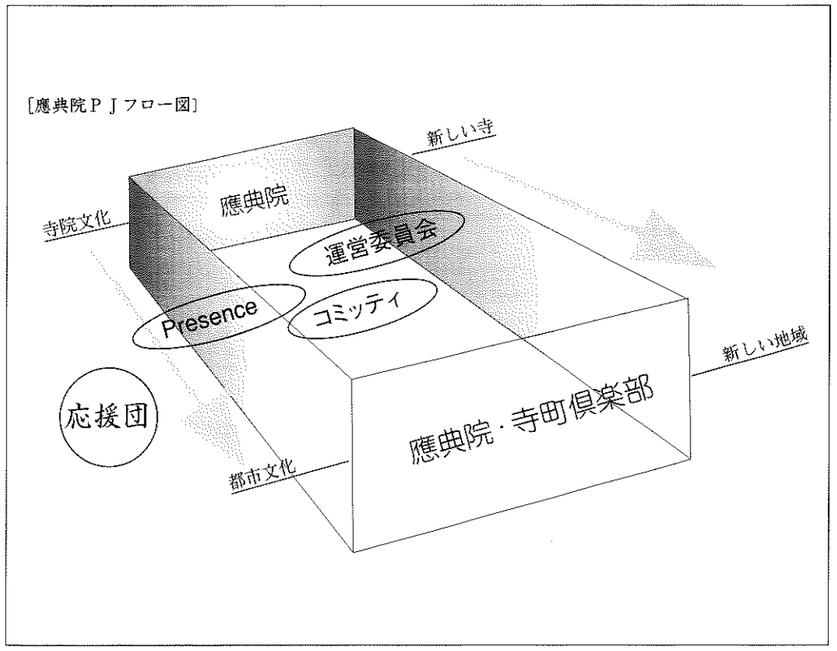
開かれた應典院を実現するために、私たちがまず決断しなくてはならなかったのは、宗教法人應典院と活動組織を独立させるという考え方でした。残念ながら、一般社会の宗教法人に対する先入観や誤解はまだまだ根が深い。行政や企業にもまだまだ宗教お断りという体質が強いのも、大きな検討材料でした。

大きな客船に例えれば、宗教法人應典院は船のオーナー、乗組員は法類や檀家さんを初め各国生え抜きのスタッフが担い、いろいろな国々から集まった船客をお持てなしする、という構図です。

平生の船を運航するのは、優秀な乗組員です。應典院では、これを應典院プロジェクトといって、法類や檀家さん、また各方面から一般市民のブレーンを集めて、その組織を編成しています。

下図を見ていただくと、よく分かると思いますが、いちばん奥にある宗教法人應典院がこの発光源。そこから大きなスクリーンに投影されて、新しい應典院寺町倶楽部として広がるわけです。

いろんな名前があってややこしいのですが、宗教法人應典院、應典院プロジェクト、應典院寺町倶楽部という3つの関連をご理解いただきたいと思います。



應典院寺町倶楽部の会員

倶楽部は應典院プロジェクトの会員組織ですから、宗教も宗派も問いません。いわばＮＰＯ（民間の非営利組織）として、広く一般から会員を募り、会員による協同運営を主旨としています。

倶楽部の会員は、信販会社のようにサービスを受けるお客さん会員とは違います。会員は應典院プロジェクトを支えるサポーターであり、会員からいただいた会費は、プロジェクトの活動資金に充当されます。それを通じてよりよい社会の実現にともに参加していただくことが目的であって、至れり尽くせりのサービスはできないかもしれません。

でも、会員自身に「学ぶ」という意思があれば、そのメリットはとても盛りだくさん。月例の「寺子屋トーク」の聴講などいろんな講座に参加できますし、何より自分自身の企画で應典院を活用していただくこともできます。

その他、会員制度の詳細については、入会の案内書が出ていますので、こちらをご参照ください。

それと、寺町倶楽部とは別に、應典院プロジェクト全体を運営していくためには、いくつか専門家の知恵が必要になります。應典院の寺門経営を監査する運営委員会、應典院プロジェクトの企画室であるPresence、また将来的には会員の中から企画委員を選んでコミッティーを編成することも構想しています。

それらとは少しスタンスが異なりますが、應典院プロジェクト応援団（左）は、これからの活動にアドバイザーとして、また講師として参加いただく方々です。ジャンルはいろいろですが、いずれも斯界一線の方々ですので、應典院プロジェクトの多彩な展開が期待できます。

学びのチャンス、いろいろ

それで、どんなことするの？、ですが、いまのところレギュラー企画を中心に煮詰めつつあります。

まず「シリーズ・寺子屋トーク」。これはほぼ月例の講演会で、応援団をはじめ、各方面で活躍する方々を招いて、「こころ・生き方・感動」について語っていただきます。また、地域交流事業としては、地域の親子を対象にした「職人講座」や「自然教室」の開催、寺町を主題に都市と異界を考えるシリーズ講座なども企画しています。

具体的な学びの場としては、教室事業が中心で、5月から「わたしから始まるコミュニケーション学入門」「ホームパーティーの達人」「ワールドスタディ・在住外国人ママに聞く」の3つの開講が予定されています。

4月末の落慶の後、オープニングとしては大がかりな写真展を計画する他、いくつかの舞台公演も共催企画で進めています。

應典院は、専門の劇場ではありませんし、貸館でもありません。プロが固定化する場所ではなく、参加者どうしがあれこれかかわりあいながら創造する場所です。高名な大学教授や宗教家の言うことより、自分で気づき学んだことこそ、だいじだと考えています。これまでの主従の関係と違って、ひとりひとりが主となって、全体にかかわりあっていきたいと思います。

会員募集が、新年からスタートしました。参加する方、応援してくださる方、どうか應典院の試みにご協力をお願いいたします。

應典院プロジェクト応援団

雨森　孝悦	とよなか国際交流協会事務局長
有田　典代	関西国際交流団体協議会事務局次長
粟野　真造	国際子ども権利センター代表
伊木　　稔	サントリー不易流行研究所部長
伊勢戸佐一郎	東大阪短期大学教授
池田　　潤	アミューズ取締役専務
岩井　珠惠	クリエイティブフォーラム 代表
大村　英昭	大阪大学教授
河内　厚郎	評論家・文化プロデューサー
倉光　弘己	神戸大学教授
山藤　　泰	大阪ガスエネルギー文化研究所々長
清水洋一郎	ＪＴＢ関西営業本部営業開発部長
汐見　稔幸	東京大学助教授
篠崎由紀子	都市生活研究所々長
津村　　卓	演劇プロデューサー
橋爪　紳也	京都精華大学助教授
橋本　敏子	生活環境文化研究所々長
長谷川恵一	エール学園理事長
早瀬　　昇	大阪ボランティア協会事務局長
林　　信夫	21世紀ディレクターズユニオン代表
古川　俊之	国立大阪病院名誉院長
校條（めんじょう）　諭	文化科学研究所常務取締役
渡辺　　武	大坂城天守閣館長

（50音順・敬称略）